

機関番号：14602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21710269

研究課題名(和文) 「性差医学・医療」の社会学

：医学・医療実践における「性差や性別に関する知」の検討

研究課題名(英文) Sociology of “Gender-Specific Medicine”

：A Study on “Knowledge of Sex and Gender difference” in the Medical Field

研究代表者

中塚 朋子 (NAKATSUKA TOMOKO)

奈良女子大学・大学院人間文化研究科・博士研究員

研究者番号：50457131

研究成果の概要(和文)：

本研究は、「性差医学・医療」に関する社会的な調査研究である。「性差医学・医療」の動向を把握し、取り組みの意義や課題を検討しつつ、「性差や性別に関する知」が産出される実践あるいは領域(研究・臨床・教育)の分析を行った。主に、(1)「性差医学・医療」の社会史、(2)「性差医学・医療」の実践の分析、(3)「性差医学・医療」のエスノメソドロジー研究の3つを柱に研究を推進した。

研究成果の概要(英文)：

This study is a sociological research on “Gender-Specific Medicine”. The purpose is to grasp a trend of the practices and to examine the significance and the issues. The subject of this research is to analyze the process of producing “knowledge of sex and gender difference” in the medical field. The design of this research was as follows. (1) A social history of “Gender-Specific Medicine”, (2) An analysis of the practice of “Gender-Specific Medicine”, (3) Ethnomethodology of “Gender-Specific Medicine”.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：ジェンダー、性差医学・医療、社会学

1. 研究開始当初の背景

(1) 専門分野としての「性差医学・医療」

医療の現場や医学の領域において、「性差医学・医療」(Gender-Specific Medicine)という専門分野が登場した。国際的に見れば、2006年2月に第1回国際性差医療学会がドイツのベルリンで開催された。日本においても、日本性差医学・医療学会第1回学術集会

が2008年2月に東京で開催され、以後、年1回の学術集会が開かれている。とりわけ、日本では、「性差医学・医療」は、女性専用外来が全国各地に開設されることで一般化し、学術的な理念と実践が推し進められた。

(2) 「性差医学・医療」の定義

「性差医療」は、「性差を考慮した医療」「性差に配慮した医療」とも呼ばれるが、その普

及推進において中心的な役割を果たしてきた天野恵子によると、次のように定義される。「性差を考慮した医療(Gender-Specific Medicine)とは一男女比が圧倒的に一方の性に傾いている病態、発症率はほぼ同じでも、男女間で臨床的に差を見るもの、いまだ生理的、生物学的解明が男性または女性で遅れている病態、社会的男女の地位と健康の関連に関する研究を進め、その結果を疾病の診断、治療法、予防措置へ反映することを目的とした医療改革である」。いわば、「性差医療」は、「男女間の差異」として現れる疾患や病態の差異を考慮した医療のことであり、これらの差異を研究する「性差医学」を発展させ、その研究結果を疾病の診断・治療・予防に反映させることを目的とした取り組みである。

(3)「性差医学・医療」の登場

「性差医学・医療」の登場は、生殖器以外の臓器に関する女性の医療情報が、医療の歴史において過小評価されてきたことに端を発している。臨床的研究の多くが主として男性を被験者に行われ、その知見が何の疑いもなく女性に当てはめられてきたことが国内外で問題化された。「性差医学・医療」への認識は高まりを見せており、「根拠に基づく医療(Evidence-based Medicine)」の推進と重なり、学会や医学教育を通して急速に浸透しつつある。

1) 天野恵子,2005,『第12回ヘルスリサーチフォーラム2005年度』ファイザーヘルスリサーチ振興財団。

2. 研究の目的

(1)研究目的

本研究は、「性差医学・医療」(Gender-Specific Medicine)の実践を分析対象とした社会学的研究である。

研究目的は、次の2点である。第1に、「性差医学・医療」の動向を全体的かつ総合的に把握し、その取り組みの意義や課題を検討することである。第2に、「性差医学・医療」の取り組みを「性差や性別に関する知」が産出される実践あるいは現場(研究・臨床・教育)として相対的に捉え、その産出過程を分析することである。前者は学際的な視点や手法を基本とし、後者は社会学的な視点や手法を用いた検討となる。これらは、ジェンダー研究の横断的視点によって生じる概念的課題を明らかにする上でも重要な作業である。

(2)ジェンダー研究の視点

今日、人文・社会科学のみならず、生物学や医学を含む様々な分野においてジェンダーの視点を取り入れた研究が進められている。しかしながら、ジェンダー概念の使用法

が多様であり、明確な一致をみているとは言えない。そのことが十分に認識されず誤解を生んでいることもある。「ジェンダーの視点による学術の再構築」を進めていく上でも、「身体的性差」と「社会的性差」の関連性をどう考えるべきかという問題を考察する必要がある。また、性差や性別に関する研究の動向に注意を払い、学問の垣根を越えて相互に研究の交流機会を持つことが必要となる。

(3)医療社会学の視点

医療社会学は、二つの視点によって区分される。「医療を対象とする社会学(Sociology of Medicine)」と「医療における社会学(Sociology in Medicine)」である。この分類によれば、「性差医学・医療」の専門家が行う医療社会学は、医学や医療において社会科学的方法のアプローチをとる「医療における社会学」である。一方、本研究は、さらにその実践を相対化するため、医学や医療そのものを考察の目的とした「医療を対象とした社会学」となる。両者は重要なアプローチであり、相互の研究交流を通して、医学や医療、ジェンダーの課題に取り組むことが必要である。

3. 研究の方法

(1)研究の方針

本研究は、「性差医療・医学」を、社会学の立場から相対化し、検討するものである。個人研究として情報や資料を収集し分析を進めていく過程と、複数の共同研究で得られるデータを個別の研究関心によって分析していく過程の「二層方式」の体制をとった。

対象は、医学や医療の領域における専門的知識の産出や実践(研究・臨床・教育)についてである。主に、(1)「性差医学・医療」の社会史、(2)「性差医学・医療」の実践の分析、(3)「性差医学・医療」のエスノメソドロギー研究の3つを柱として研究を推進した。

(2)研究の方法

①「性差医学・医療」の社会史

「性差医学・医療」の把握や理解を目的に、国内外の「性差医学・医療」の取り組みや経緯を主に文献資料をもとに情報を収集し、「性差医学・医療」の社会史として整理した。

②「性差医学・医療」の実践の分析

「性差医学・医療」に関する実践の分析として、「性差医学・医療」に関する文献、報告書、記事等を収集し、研究の対象や方法などの情報からその特徴の分類を行い、質的・量的な方法によって整理した。

また、「性差医学・医療」の実践(研究・臨床・教育)に関する意義や課題を探るため、関係者へ聞き取り調査を実施した。

③「性差医学・医療」のエスノメソドロジー
「性差医学・医療」のエスノメソドロジー
研究として次のような研究活動を行った。

共同研究「臨床教育のビデオエスノグラフィ」(代表：徳島大学 樫田美雄 准教授)
において、医学部生による医療面接のグループ
実習の教育場面の検討を行った。

共同研究「『薬害 HIV』問題経験の社会学的
研究—ナラティブ・アプローチから」および
「『血液の安全性』の社会学的研究—『薬
害 HIV』の多声的記述」(代表：産業医科大学
種田博之 講師)では、非加熱製剤による
HIV 感染問題に関する調査研究を実施した。

4. 研究成果

(1)研究成果の概要

①「性差医学・医療」の社会史〔概略〕

性差医療(Gender-Specific Medicine)の始
まりは、1980年代の米国に遡る。米国では、
1960年代のサリドマイド事件や、1970年代
のDSM 医療事故をきっかけに、生理医学の
研究対象に女性が除外され、十数年にわたり、
薬の治験を含む臨床研究から女性を除外す
る状況が続いた。女性生殖器と乳腺の悪性腫
瘍以外の臨床試験の多くは、対象から女性を
除外し、男性をモデルに計画された。

しかし、1980年代後半に、女性の健康に
関する施策の策定にあたり、これまでの調査
研究をまとめようとしたところ、女性のデー
タが非常に少ないことが明らかとなった。報
告を受け、1986年に米国国立衛生研究所は、
女性や少数民族・人種を調査研究の対象に含
むことを義務付ける通達を出した。その後、
1990年に女性の疾病の予防・診断・治療の
向上のため、関連する基礎研究を支援する女
性健康局を開設。米国政府は、研究者に対し、
女性に関する疫学・臨床研究・基礎研究を奨
励し、製薬会社に対し、治療に際し、必ず女
性を対象例の半分を含むよう義務付けた。

その後、女性の健康についての大規模な疫
学調査が開始され(1991年)、女性や少数民
族・人種を薬の臨床試験に含むことを義務付
ける法令の成立(1993年)、薬剤治験のガイ
ドラインの公表やOffice on Women's Health
の設立(1994年)が続いた。さらに、政府
機関の女性医療の分野や研究所の設立が相
次ぎ、研究、診療、教育が実施されている。

日本では、「性差医学・医療」の理念は、
1999年の日本心臓学会女性の心疾患に関す
るシンポジウムで天野恵子によって紹介さ
れた。天野は、微小血管狭心症をはじめ、男
性を中心とした医療により見過ごされてき
た疾患や症例が多数あることを指摘した。そ
して、米国で国家的な取り組みとなっている
性差医療の動向を紹介し、性差の視点を考慮

した医学や医療の重要性を唱えた。

その後、米国と同様に、まずは女性医療の
立ち遅れを是正し、女性の健康に関する研究
を重ね Evidence を構築するとともに、性差
医療の実践の場として女性専用外来の立ち
上げが構想された。循環器系の医師を中心と
して、2001年5月に鹿児島大学病院、10月
に千葉県立東金病院で女性専用外来が開設
された。同時期に、婦人科系の女性医師を中
心としたネットワークの活動も重なり、全国
に女性専用外来が次々と開設された。

特に、千葉県の取り組みは各地の保健医療
行政に影響を与えた。堂本暁子知事(当時)
の就任に伴い、性差医療が県の施策となつた
(「健康ちば21」2001年)。堂本氏の要請を
受け、天野医師も千葉県の施策に携わるこ
ととなった。女性専用外来や女性のための健康
相談窓口の開設、性差の視点を組み込んだ疫
学調査の実施、健康自己管理のための講座、
保健医療従事者に向けた研修会やコーディネ
ート養成など、数々の事業が行われた。

性差を変数とした Evidence の構築のほか、
女性専用外来における医師や患者の診療状
況や満足度に関する調査、医学教育や卒後研
修・研究への性差医療・医学の取り組みが、
各医療機関や自治体で進められている。

②「性差医学・医療」の実践の分析

性差医療・医学の実践が一般に周知される
機会を捉える指標の一つに、新聞記事の掲載
件数がある。その推移をみると、活動が盛ん
な時期や注目を集めた時期が明らかになる。

朝日新聞・読売新聞・毎日新聞が公開する
データベースや縮刷版を利用して、関連する
語句で検索し、記事数の推移を解析した。

検索期間は、各データベースで検索が可能
な時点から2010年12月31日までの期間で
ある〔朝日新聞(聞蔵Ⅱ)：1985年1月1日

表1 検索語一覧

「性差医療・医学」群		「専用外来」群	
A	「性差医療」	F	「女性専用外来」
B	「性差」「医療」「配慮」	G	「女性専門外来」
C	「性差」「医療」「考慮」	H	「女性総合外来」
D	「女性医療」	I	「女性外来」
E	「男性医療」	G	「女性専用診療」
		K	「女性専門診療」
		L	「女性総合診療」
		M	「女性診療」
		N	「女性&専用外来 +専用外来+専門 外来+総合外来」
		O	「男性専用外来」
		P	「男性専門外来」
		Q	「男性外来」
		R	「男性&専用外来 +専門外来+総合 外来」

～2010年12月31日、読売新聞（ヨミダス文書館）：1986年1月1日～2010年12月31日、毎日新聞（毎日 News パック）：1987年1月1日～2010年12月31日]。

検索語は、関連する語句を選び出し、データベースごとに複数回に分けて検索をかけた。検索語は、「性差医学・医療」群と「専用外来」群に分けて整理した（表1）。検索

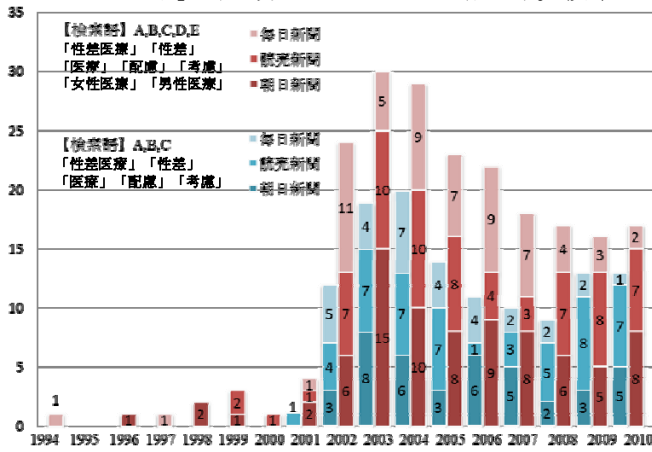


図1 「性差医療」群 実質記事数推移

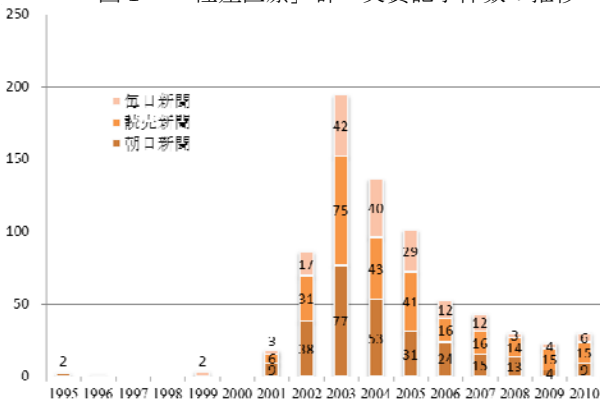


図2 「専用外来」群 実質記事数推移

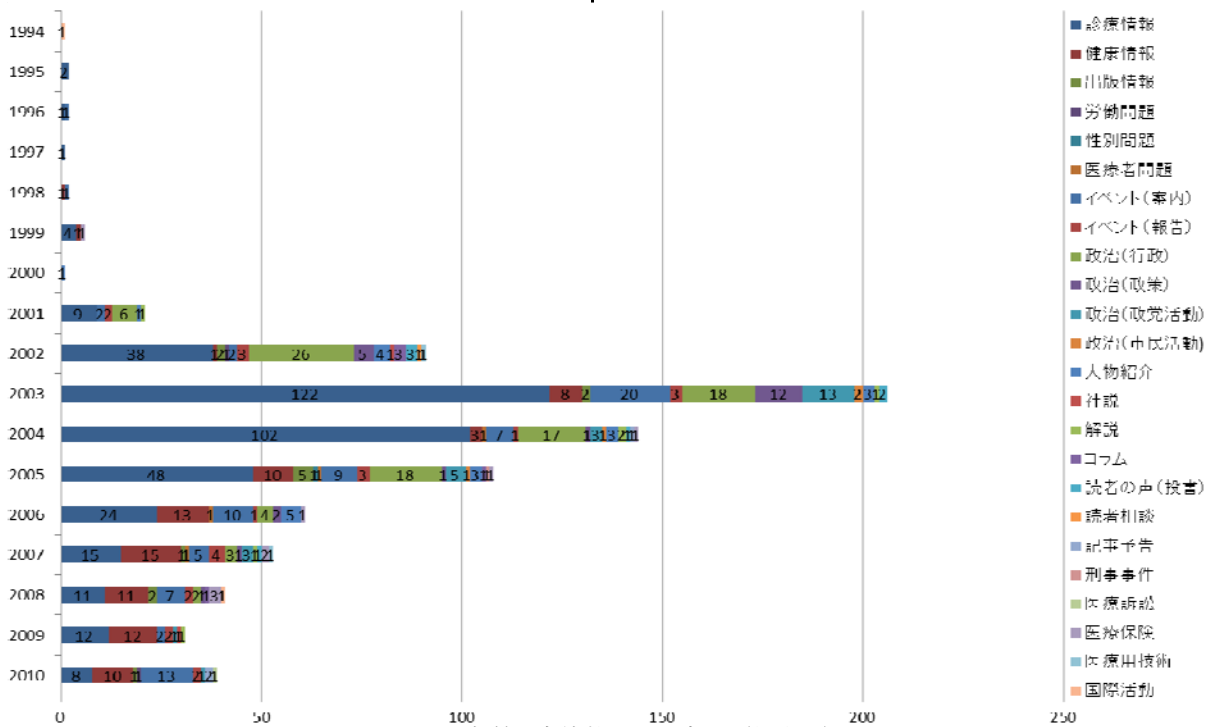


図3 実質記事数とその内訳（年次別）

結果は、検索語により抽出した記事の件数（ヒット記事数）、そのうち内容が該当する記事の件数（該当記事数）、重複した記事を集約した件数（実質記事数）を導き出すことで、「性差医学・医療」や「専用外来」に関する語句の頻出の割合や数を把握した。

「性差医学・医療」群の語句のうち、「性差医療」の下位概念として「女性医療」や「男性医療」という語句が使用されることがある。そのため、「性差医学・医療」群の実質記事数を「女性医療」「男性医療」を含めた値と含めない値で比較した。「女性医療」という用語は、1994年から登場しており、日常用語としても利用される傾向にある。一方、「性差医療」は、専門用語としての使用が多く、どのデータベースでも“女性専用外来元年”である2001年が初出であった（図1）。

また、「専用外来」群の実質記事数の推移をみると、こちらも2001年から関連記事が登場し、とくに関連記事が頻出した時期は、全国各地で女性専用外来が開設された2002～2005年の時期と重なった（図2）。

表2 実質記事数の内訳（内容別）合計810件

	(件)	(件)	
診療情報	397	人物紹介	20
健康情報	85	社説	2
出版情報	13	解説	6
労働問題	2	コラム	5
性別問題	1	読者の声（投書）	7
医療者問題	4	読者相談	1
イベント（案内）	79	記事予告	3
イベント（報告）	23	刑事事件	1
政治（行政）	94	医療訴訟	1
政治（政策）	23	医療保険	9
政治（政党活動）	26	医療用技術	2
政治（市民活動）	4	国際活動	2

「性差医学・医療」「専門外来」に関する記事を集約し（3紙の実質記事数合計＝810件）、記事の内容により分類すると、医療情報として読者へ提供する「診療情報」（397件）、「健康情報」（85件）、「人物紹介」（20件）の記事が過半数を占めている。次いで、医療政策として女性専用外来の設置が各地で行われたことを背景として、「行政」（94件）「政策」（23件）、「政党活動」（26件）、「市民活動」（24件）などの政治的な取り組みの記事が多く見られた。そのほか、関連する「イベント」の「(案内)」(79件)や「(報告)」(23件)の記事が目立った(表2, 図3)。

＊

『性差と医療』は、国内や国外の「性差医学・医療」に関する研究や活動が報告・記録された専門誌である。2004年4月号(Vol.0 No.0)から2006年12月号(Vol.3 No.12)まで発行された。本誌に掲載された誌面の内容を解析し、「性差医学・医療」の研究や活動の関心・対象・方法について検討した。

まず、内容を確認したうえで、各号の記事を一覧にし、掲載された頁数によって数量化した。さらに、内容ごとに記事を分類し、全体の誌面に占める割合を算出した(図4)(年次別データなど詳細については別稿に譲る)。

紙面の構成は、「巻頭言」「GSM特集(インタビュー、対談、鼎談、座談会)」「特集論文」「特別レポート」「診療情報」「国外の文献」「データ情報」「学会・研究会情報」「エッセイ」「ニュース」が、ほぼ毎号掲載される。このほか、「診療ガイド情報」「キャリア紹介」が、連載記事として組まれることもある。「投稿論文」も掲載するが、件数は少なく、論文の多くは「特集論文」である。

内容は、主に次のとおりである。「GSM特集」では、性差医学・医療の分野や隣接する分野の著名な研究者が集い、それぞれの知見を述べる様子が紹介される。これらの記事は、性差や性別に関する関係者の認識が明らかとなり、その説明の方法がひとつの分析の対象になりうる。「特集論文」は、性差医学・医療に特徴的な疾患や症状について特集を組み、論文を掲載している。婦人科疾患に限らず、様々な疾患や症状に関する検討が行われ、性差を変数とした研究の報告、Evidence構築の場となっている。「特別レポート」は、単発の性差研究に関する論文や解説、学会報告が含まれる。「診療情報」では、性差医療・

医学と関連する各地の専用外来を紹介する。「国外の文献」は、海外で版を重ね出版されているウィメンズヘルスに関する文献を翻訳し、読者に性差医療に関する学習機会を提供している。「データ情報」では、国内外の統計データで示される性差情報が提供される。「診療ガイド情報」については、実際の診療への具体的な対応が示される。ガイドラインの再検討、DVへの対応や漢方処方など、診療情報を共有する特集がみられる。「キャリア情報」では、女性医師や女性メディカルの個々の経験を報告するもので、医療者モデルを提示する紙面となっている。

本誌は、販売部数の伸び悩みにより2006年12月に休刊となる。とはいえ、天野恵子によれば、性差医学・医療の視点が認知されるにともない、各専門領域において性差を加味した報告が学会・研究会および学術誌において増加傾向にあると報告されている。

＊

国内の性差医学・医療の展開や見解について天野恵子医師へ聞き取り調査を行った。現在、天野氏が顧問を務め女性外来を担当している静風荘病院を訪問し、「性差医学・医療」の実践(研究・臨床・教育)について尋ねた。

聞き取りで得られた内容は、次のとおりである。卒業後の北米での経験、日本での医局勤務時代、性差医学・医療との出会い、性差医学・医療の普及、女性外来と女性医師(女性医師の働き方・育成)、性差医学・医療と女性外来(探究・蓄積・応用)、性差医学・医療に関する研究と教育、学術雑誌『性差と医療』、「性差」「性別」について(“sex/gender”概念を共有する諸分野の視点について)、性差医学・医療の実践としての女性外来、医療従事者のネットワークと活動について。

“まだまだ解明されていない病気があるのではないか”という強い学術的関心から、天野氏は性差医学・医療に取り組み始めた(研究)。女性外来はその実践の場であった(臨床)。臨床を通して研究は蓄積され、成果は臨床に応用される。その担い手として医師の育成が鍵となる(教育)。特に女性外来においては、女性医師の活用と育成、職場環境の整備が重要である、と天野氏は語った。

③「性差医学・医療」のエスノメソドロジー
共同研究として参加している「臨床教育のビデオエスノグラフィー」では、医学教育場面の観察と分析を行った。

X 大学医学部で、医学生による医療面接のグループ実習が行われた。2010年2月の授業(講義・ロールプレイ実習)では、参加学生の同意のもと、その様子を複数台の撮影機器を用いて録画した。その後、授業担当者を交えて相互行為場面に関する検討を重ねた。

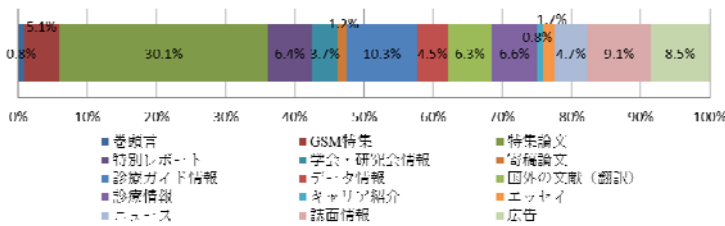


図4 『性差と医療』掲載記事の内容

授業の課題は、患者・家族・医療者と、学生自身がそれぞれの立場を演じることによって、予期せぬ検査結果の告知の状況について理解を深めるというものである。授業で設定された場面は、不妊治療を続けていたカップルに対して、夫がクラインフェルター症候群であることを告げるというものであった。

グループ実習の前に、担当教員により1時間程度の講義が行われ、疾患に関する情報が具体的な症例とともに解説される。その後、グループに分かれ、検討事項〔告知の対象・方法・内容はどのようにするのか、告知の際に配慮すべきこと何か、今後の治療計画、患者や家族の気持ちなど〕を話し合う。配役後、患者や家族の個別的な特徴について話し合い、人物設定を行う。医師役の学生は、話し合いのあと、グループ間で入れ替える。

一連のロールプレイ実習で観察されたことは、授業を通して「性差や性別に関する知」をどのように伝達・共有しているのか、医学的知識と日常的な知識を動員しながらどのように理解しようとしているのか、学生たちが臨床でどのように応用しようしているのかという過程とその方法であった。

授業のはじめに講義される内容は、グループごとに行われる話し合いの中で、参照され準拠すべき重要な情報として、疑問の余地なく扱われていた。また、役柄を特徴づける場面では、学生たちがイメージする患者・家族像を示すものであった。学生たちは、患者や家族が抱える背景や心情、反応を想像することにより、患者一般に対するイメージと個別の患者に対するイメージを形作っていた。そして、患者・家族像をイメージすることにより、医師としてどのようにふるまえばよいかという医師としての役割や振る舞い、さらには医師像を導き出す実践を行っていた。

*

共同研究『『薬害 HIV』問題経験の社会学的研究—ナラティブ・アプローチから』および『『血液の安全性』の社会学的研究—『薬害 HIV』の多声的記述』において、非加熱製剤による HIV 感染問題に関わった医師たちへの聞き取りデータの分析を行った。

HIV/AIDS 治療に小児科医として関わってきた4名の医師の語りにもみられる特有の経験について項目ごとに整理を行い、告知あるいは非告知に関する問題状況を明らかにした〔項目：告知に対する姿勢、患者・家族の反応、抗体陽性の意味が不明確、治療薬のない時期、世間の厳しい反応、患者本人や家族の意向への配慮、二次感染の可能性、治療薬の登場、知りたくない権利、小児患者との長い付き合い、医師—患者の信頼関係、診療と支援体制、安定した治療法の確立〕。

*

このほか、医療・医学を対象としたもので

はないが、エスノメソドロジー研究の成果として、「写真鑑賞場面における相互行為分析」という主題で報告を行った。

「写真」は、人にある時点の記憶や場所について喚起あるいは想起させる効果を持つ。一組の夫婦が、自分たちの住んでいる地域の写真を鑑賞する場面をビデオで撮影し、その録画データを分析した。地域の歴史写真を鑑賞する夫婦のコミュニケーションと、その過程で起きたトラブルの修復過程を検討した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

①中塚朋子、「小児科医師による HIV 感染『告知』の諸相—血友病治療・HIV/AIDS 治療の経験から—」、『『薬害 HIV』問題経験の社会学的研究—ナラティブ・アプローチから』(平成 19~21 年度科学研究費補助金 基盤研究(B)報告書)、査読無、2010 年、p.70-97。

②中塚朋子・櫻井裕子・山内美月・榎田美雄、「写真鑑賞場面における相互行為分析—地域の歴史写真集を介した夫婦のコミュニケーション—」、『徳島大学 社会科学研究』(徳島大学総合科学部)、査読無、第 23 号、2010 年、p.1-29。

〔学会発表〕(計 2 件)

①中塚朋子・櫻井裕子・山内美月・榎田美雄、「写真鑑賞場面における相互行為分析—地域の歴史写真集を介した夫婦のコミュニケーション—」、平成 22 年度日本社会情報学会合同大会、2010 年 9 月 4 日、長崎県立大学(長崎県)。

②榎田美雄・宮崎彩子・真鍋陸太郎、北村隆憲・岡田光弘・五十嵐素子、阿部智恵子・藤崎和彦・中塚朋子・長谷川和代・米田憲市、「医学部 5 年生に対するロールプレイ授業のビデオエスノグラフィ—」、第 42 回日本医学教育学会大会、2010 年 7 月 30 日、都市センターホテル(東京都)。

〔図書〕(計 1 件)

①執筆者：中塚朋子ほか多数、編著者：小林多寿子、嵯峨野書院、担当執筆箇所「書評：虎井まさ衛 1996 年『女から男になったワタシ』青弓社」(p.298-301)『ライフストーリー・ガイドブック—ひとがひとに会うために』、2010 年、400 ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中塚 朋子 (NAKATSUKA TOMOKO)

奈良女子大学大学院・人間文化研究科・博士研究員

研究者番号：50457131